

琉球語安慶名方言の動詞の形づくり

狩俣, 繁久 / カリマタ, シゲヒサ

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

34

(開始ページ / Start Page)

85

(終了ページ / End Page)

107

(発行年 / Year)

2010-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012518>

琉球語安慶名方言の動詞の形づくり

かりまたしげひさ

1. はじめに

人間の言語＝言語活動において もっとも基本的な単位として単語と文が分化している。単語と文は、材料と構築物という関係でむすびついている。語彙的なものと文法的なものとの統一物である単語は、文を構成する要素（文の部分）として文のなかにはいりこみ、文法的な機能、意味をあらわしわけけるための単語形式として存在する。単語は、語彙的な意味と文法的な意味の一部を共通にもちながら、一部の文法的な機能と意味の面で区別される単語形式のパラディグマティックな体系をなしている。文法的な機能、意味をあらわしわけけるために語形変化する単語のなかで、動詞という品詞は、たくさんの単語形式（変化形）を有するが、その単語形式は、形態論的なカテゴリーとそれを構成する形態論的な形によって組織された体系を有している¹⁾。

沖縄島うるま市安慶名方言の動詞のもつ形態論的なカテゴリーには、現代日本語の動詞とおなじように、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、やりもらいがある。形態論的なカテゴリーは、それを構成する形態論的な形をパラディグマティックな体系に統合する一般化された意味・特徴である。テンス、ムード、みとめかた、……などの個々の形態論的なカテゴリーは、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるもの、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるもの、語尾のとりかえによってあらわされるものがある²⁾。

安慶名方言のばあい、音韻変化の結果、補助動詞だったものが語尾や接尾辞に移行したり、助辞が語尾に移行したりしていて、日本語と起源をおなじくするものでありながら、形づくりの要素としての性格を異にするようになったものがある。

ヴォイス

能動の形 kam-uN（たべる） 受動の形 kam-ari:N（たべられる）

みとめ方

肯定 kam-uN（たべる） 否定 kam-aN（たべない）

ていねいさ

ふつう kam-uN（たべる） ていねい kam-abi:N（たべます）

1 単語と文の定義は、鈴木重幸（1972）、同（1996）、奥田靖雄（1973）、同（1974）などにしたがっている。

2 格、とりたてを中心にした名詞の語形変化を「曲用」というのに対して、動詞の語形変化を「活用」という。語形変化した形式を「活用形」という。

アスペクト

完成相 kam-uN（たべる） 継続相 ka-doꝛN （たべている）

kamuN は、受動の形 kamariꝛN に対して能動の形として、否定の形 kamaN に対しては肯定の形として、ていねいないいかたの kamabiꝛN に対してはふつうのいいかたとして、継続相の kadoꝛN に対しては完成相として対立している。kamuN は、能動、肯定、ふつう、完成相などの複合的な意味をもった形式なのである。kamariꝛN も kamaN も kamabiꝛN も kadoꝛN も、kamuN と同様に他の形式との対立のなかで複合的な意味を実現する形式として存在している。

第 1 表

完成				継続			
kamuN				kadoꝛN			
肯定		否定		肯定		否定	
kamuN		kamaN		kadoꝛN		kadeꝛuraN	
ふつう	ていねい	ふつう	ていねい	ふつう	ていねい	ふつう	ていねい
kamuN	kamabiꝛN	kamaN	kamabiraN	kadoꝛN	kadoꝛibiN	kadeꝛuraN	kadeꝛuibiraN

第 2 表

完成	肯定		否定	
	kamari:N		kamariraN	
	ふつう	ていねい	ふつう	ていねい
	kamari:N	kamarijabi:N	kamariraN	kamarijabiraN
継続	肯定		否定	
	kamaQto:N		kamaQte:uraN	
	ふつう	ていねい	ふつう	ていねい
	kamaQto:N	kamaQtozjabin	kamaQte:uraN	kamaQteuibiraN

テンス、ムードは、せまい意味での活用にかかわる形態論的なカテゴリーで、特定の位置で意味と機能を構成する³⁾。kamuN は、過去形 kadaN と kamutaN に対して非過去というテンス的な意味によって対立するが、過去形とともにテンスという形態論的なカテゴリーによって統一されている。同様に、kamuN は、質問法 kamumi（肯否たずね）や kamuga（疑問詞たずね）、はたらきかけ法 kameꝛ（命令形）、kama（勧誘形）に対しては直説法をというムードの意味をもつことによって対立し、統一されているのである。そし

3 テンス・ムードとアスペクトは、終止的な述語になってはたらく動詞の主要な機能にかかわって、三位一体的にからみあっている。とくに安慶名方言をはじめとする奄美沖縄諸方言においては、進行相をあらわしていた融合した形式と融合しない完成相をあらわす形式が統合し、動詞の基本的な形式を形成した歴史的な経緯があって、アスペクト・テンス・ムード体系の三位一体性は重要である。

て、kamuN は、直説法、断定、非過去といった複合的な文法的な意味をもった形式であり、同様に、kamumi や kamuga、kame: や kama も複合的な文法的な意味をもった形式なのである。

第1表と第2表にあげたアスペクト、ヴォイス、みとめかた、ていねいさ、もくろみ、やりもらいの文法的な形を構成する形式（たとえば、第2表の kamarijabizN（食べられます）、kamaQteruibiraN（食べられていません））も第4表にかかげた kamuN とおなじようなテンス、ムード、文中での機能による活用形のパラダイムをもつ。

安慶名方言の動詞の個々の形態論的な形も、標準語と同様に語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素に分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のCATEGORYに属することを表現するやくわりをもっている要素」であり、語尾は、「同一の（活用以外の）CATEGORYに属する個々の活用形を特徴づけるやくわりをもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じて変化する部分で、のこりの変化しない部分が語幹である。助辞は活用形のさらにあとについて文法的な意味の表現に参加する部分である。語幹と語尾の境界には kak- e: のように「-」を、単語と助辞の境界には nudi=kara のように「=」を挿入する⁴。補助動詞など補助的な単語のあいだは1マスあける（ただし本稿では見やすさを考慮して以下では1マスあけるかわりに「・」をいれることがある）。

2. 安慶名方言の動詞 形づくりの要素

安慶名方言をふくむおおくの琉球語の動詞のあらわす形態論的なCATEGORYとしてのテンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、やりもらいと、それを構成する文法的な形の対立のしかた、文法的な形を構成する語幹（あるいは語根）は現代日本語語の動詞のそれと共通のものを有し音韻的にも対応している。語尾や助辞にも、現代日本語のそれと対応し、現代日本語と形態論的によく似た構造をもつものがすくなくない。その一方で、琉球語に固有の語尾や助辞、接尾辞もあって、琉球語独自の形態論的な体系を有している。

o > u、e > i の せま母音化、それにともなう子音の変化、前後する音声の同化による子音の変化などの音韻変化があり、その音韻変化は動詞の語幹、および語尾の音声形式にもおよんでいて、安慶名方言の動詞の形づくりを複雑なものにしている。

安慶名方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹のみつつの変種（ヴァリエーション）が存在する⁵。基本語幹と音便語幹とよばれる語幹の変種は、現代日本語語にもみ

4 語幹、語尾の定義は、鈴木重幸（1972）、同（1983a）、同（1983b）にしたがう。

5 みつつの語幹の変種の名称は、上村幸雄（1963）による。なお、上村（1963）は上記みつつの語幹のほかに「融合語幹」「短縮形語幹」も設定している。

られるが、連用語幹は、奄美沖縄諸方言に特徴的にみられるものであろう⁶⁾。

第3表

基本語幹	音便語幹	連用語幹
kak-eꞤ (書け)	ka-tʃaꞤ (書いた)	katʃ-uꞤ (書く)
tur-eꞤ (取れ)	tu-taꞤ (取った)	tu-iꞤ (取る)
jum-eꞤ (読め)	ju-daꞤ (読んだ)	jum-uꞤ (読む)
kaNd-eꞤ (被れ)	kaN-taꞤ (被った)	kaNdʒ-uꞤ (被る)

個々の動詞がどのように語幹を形成し、どのような語尾をとまって活用形をつくるかということは、個々の動詞の形つくりにとって重要であるが、語幹と語尾の形成は、動詞を活用のタイプに分類するうえでも重要なものである。また、個々の活用形の形つくりをみることによって、個々の活用形のなりたちをしるうえでも重要である。

第4表⁷⁾ kaNdʒ-uꞤ (かぶる)

テンス ムード			非過去	過 去 形	
				第 1 過去	第 2 過去
直 説 法	断 定	一般むすび du むすび	kaNdʒ-uN kaNdʒ-uru	kaN-taN kaN-taru	kaNdʒ-utaN kaNdʒ-utaru
	推 量		kaNdʒ-uru hadʒi	kaN-taru hadʒi	kaNdʒ-utaru hadʒi
	質 問 法	Yes-No たずね		kaNdʒ-umi	kaN-tiꞥ
疑問詞たずね		kaNdʒ-uga	kaN-taga	kaNdʒ-utaga	
du むすびたずね		kaNdʒ-urui	kaN-tarui	kaNdʒ-utarui	
念おしたずね		kaNdʒ-ura	kaN-tara	kaNdʒ-utara	
は き か け ら け	命令		kaNd-i、kaNd-eꞥ、kaNd-eꞥ=wa、		
	勧誘		kaNd-a		
連体形			kaNdʒ-uru	kaN-taru	kaNdʒ-utaru
連 用 形	第一中止形		(kaNdʒ-i)		
	第二中止形		kaN-ti		
	第三中止形		kaNdʒ-aꞥni		
	先行形		kaN-ti=kara		
	同時形		kaNdʒ-agatʃiꞥ		
条 件 形	原因理由		kaNdʒ-ukutu	kaN-takutu	kaNdʒ-utakutu
	条件契機		kaNd-eꞥ、(kaNd-aꞥ)、kaNdʒ-uraꞥ、kaNdʒ-ureꞥ、kaNdʒ-iꞥneꞥ		
	うらめ条件		kaN-ti=N		

6 基本語幹も音便語幹も標準語のそれと同じ名称を使用し、そのさししめすものもほぼ重なるが、安慶名方言が独自の活用体系をもち、固有の音韻変化をこうむり、現代日本語とはことなる形つくりのしかたをとるようになっていて、その意味では同じものをさしているとはいえないだろう。

7 動詞のパラダイムを構成する各活用形については、かりまた・島袋幸子(2006)を参照。

動詞は、文の中での機能にしたがって、終止形、連体形、連用形、条件形などの形の体系をもっている。

終止形は、いいおわりの述語になって文の陳述のセンターとしてはたらくことから、テンス、ムードを表示する形式として文法的な形を発達させている。連体形は、連体的な従属節の述語になって名詞をかざる形である。連体形も非過去形と過去形の対立があり、終止形と同様に過去に2系列（第1過去形と第2過去形）があるが、連体形のあらかず時間は、いいおわりの述語があらかず時間を基準にする相対的なテンスである。

連用形は、ふたつの出来事をならべ、その時間的な関係を表現するならばあわせ文やふたまた述語文のつきそい文（従属文）の述語になる。第一中止形は、かたちのうえで現代日本語の第一中止形に対応し、単語づくりや形づくりの要素になるが、単独では述語にならない。第二中止形は、現代日本語の第二中止形に対応し、第一中止形に接辞「テ」が接続している。第三中止形は第一中止形にアリ（有り）が接続しているもので、安慶名方言では先行後続の時間的な関係をあらわすあわせ文の述語でしか使用されないが、伊平屋島方言や宮古島方言、石垣島方言では、単語づくり、形づくりの要素にもなる。

条件形は、条件づけを表現するあわせ文の従属文の述語になる。

完成相の終止形の直説法、質問法の非過去形は、第一中止形に存在動詞 'uN（居る）が補助動詞としてくみあわさり、音声的に融合したものである⁸⁾。'uN（居る）の融合した活用形と、命令形や勧誘形など'uNの融合しない活用形が同居していることは、安慶名方言の動詞の形づくり上のおおきな特徴である⁹⁾。動詞の活用形には連体形の非過去kaNd3-uru、第二過去形 kaNd3-utaru、条件形 kaNd3-uraʒ, kaNd3-ureʒ, kaNd3-ukutu, kaNd3-utakutu などの'uN 融合型の活用形と、kaN-ti, kaNd3-aʒni, kaN-ti=kara, kaNd3-agatʃi, kaNd-eʒ, kaN-takutu, kaN-ti=Nなどの'uN 非融合型の活用形が同居している。これは、動作や変化の進行をあらわしていた'uN 融合の動詞と、ひとまとまりの動作をあらわしていた'uN 非融合型の動詞が統合し、融合型の活用形が非融合型の活用形をおいだした結果であろう¹⁰⁾。条件形には融合型と非融合型が同居している。

2. 1. 基本語幹

語幹（基本語幹、連用語幹、音便語幹）と語尾のつくり方から、安慶名方言の動詞を規則変化動詞と特殊変化動詞にわけ、規則変化動詞を強変化動詞と混合変化動詞にわけ。

命令形、勧誘形は基本語幹を構成要素にもつ。直説法・質問法の非過去形と第2過去形

8 第一中止形は、検定教科書文法の「連用形」。

9 'uN の融合した形式であることから、形づくりのしかたが'uN に似ている。

10 動作や変化の進行をあらわしていた'uN融合の動詞が非融合型の動詞と統合したことは、テンス・アスペクト・ムード体系にもおおきな影響をあたえている。そのことについては、かりまた（2004）を参照。

が第一中止形に 'uN の融合したものであり、第1 過去形が第一中止形に接尾辞 -taN（古代日本語の完了の意味をあらわすがた動詞）が融合したものにさかのぼるのに対して、基本語幹を構成要素にもつ活用形は、その動詞本来の形を保存しているばあいがある。当該動詞のなりたちを知るうえで重要である。連用語幹も音便語幹も基本語幹から派生して、基本語幹からそのなりたちを説明することができるという点でも基本的であり、基本語幹と名づけるゆえんである。また、基本語幹は、文法的な派生形式をつくる語基になるという意味でも当該動詞の基本的な形式である。

第5表

安慶名方言

日本語

強変化

強変化

I m	jum-a	読もう	N l m	jom-o:
I b	jub-a	呼ぼう	N l b	job-o:
I n	fin-a	死のう	N l n	fin-o:
I k	kak-a	書こう	N l k	kak-o:
I g	kug-a	漕ごう	N l g	kog-o:
I s	sas-a	刺そう	N l s	sas-o:
I t	mat-a	待とう	N l t	mat-o:
I r 1	tur-a	取ろう	N l r	tor-o:
I r 2	tʃir-a	切ろう		kir-o:
I d	kaNd-a	被ろう		kabur-o:
I r 3	ʔarar-a	洗おう	N l w	ara-o:
I r 4	ko:r-a	買おう		ka-o:
	ʔumur-a	思おう		omo-o:
I r 5	ʔir-a/ʔja:	言おう		i-o:

混合変化

弱変化

II e 1	ʔukir-a	受けよう	N 2 e	uke-jo:
	tatir-a	立てよう		tate-jo:
	narir-a	慣れよう		nare-jo:
II e 2	ʔukir-a	起きよう	N 2 i	oki-jo:
	ʔutir-a	落ちよう		otʃi-jo:
	ʔurir-a	降りよう		ori-jo:
II i	tʃir-a	着よう	N 2 i	ki-jo:

II id	¹¹⁾ 'N:d-a	見よう	mi-jo:
特殊変化		特殊変化	
III 1	¹²⁾ 'ur-a	居ろう	or-o:
III 2	¹³⁾ ?ar-a:	有らば	ar-eba (有れば)
III 3	ku:	来よう	kojo:
III 4	sax	しょう	sijo:

安慶名方言と現代日本語の基本語幹を対比させてみてふたつのことに気づく。

ひとつは、強変化動詞において両者がよく対応していることである。たとえば、現代日本語の強変化動詞の語幹末が m になる動詞（以下 N1m 動詞）に対応する安慶名方言の強変化動詞（以下 Im）も語幹末に m があらわれる。Ib、In、Is、It、Ik、Ig など同様に語幹末の子音が対応している。

もうひとつは、現代日本語の強変化動詞の語幹末が母音になる動詞（N1w）に対応する安慶名方言の強変化動詞（Ir3、Ir4、Ir5）の語幹末に r があらわれ、両者の語幹末子音が対応しないことである。同様に現代日本語の弱変化動詞に対応する安慶名方言の動詞の基本語幹末も r になる。安慶名方言で語幹末子音が r であらわれる現象を「r 語幹化」とよぶ。

安慶名方言の Id 動詞は、現代日本語の N1r 動詞に対応し、語幹末 r の直前の音節が bu（あるいは mu）である。安慶名方言では ~bura の bu が前鼻音化 ~^mbura し、さらに両唇破裂音が鼻音になって母音がなくなった ~mra あと、後続の r の逆行同化によって調音点が両唇から舌尖 ~nd になったもので、Ir1 の変種のひとつである¹⁴⁾。kaNd-a (被ろう)、jaNd-a (破ろう)、niNd-a (眠ろう) の Id 動詞がこれに属する。

Id *kabur-e > kambure > kamure > kamre > kaNre > kaNd-i (被れ)

安慶名方言の IIid は、現代日本語の N2i に対応するが、語幹末が d になっている。IIi 動詞と同様に r 語幹化した形が Id 動詞の語尾が d になるのと同じ理由で d に変化したと推定される。

11 'N:dzuN (見る) の命令形は 'N:d-e: だが、もくろみ動詞をつくる補助動詞 'N:dzuN の命令形には、kadi ma: (食べてみる) のように r 語幹化しない形があらわれる。

12 安慶名方言の 'uN の形のうえで対応するのは、古代日本語の「をる (居る)」である。

13 安慶名方言 ?aN (有る)、および現代日本語 aru (有る) にははたらきかけ法の命令形、勧誘形が欠けているので、表には条件形をかかげる。

14 ~bura (~mura) が ~nda となる音韻変化は、?aNda (油)、kuNda (脹脛) などの名詞にも、?aNdi:N (溢れる)、jaNdi:N (破れる) などの混合変化動詞の語幹にもみられる。

II id *mir-a > mra > 'Nra > 'N:d-a (見よう)

古代日本語の f 語幹動詞 (基本語幹末子音が f の動詞で¹⁵⁾、現代日本語の N l w の動詞) に対応する安慶名方言の動詞 I r 3、I r 4、I r 5 は、基本語幹末にも r があらわれ、r 語幹化している¹⁶⁾。基本語幹が語基になり、接尾辞 -aN をつけて派生させる否定形には ?arar-aN (洗わない)、warar-aN (笑わない) のほかに、?ara:N、wara:N があって、r 語幹化した形と r 語幹化しない形が並存している。うけみの形にも ?ara:ri:N、wara:ri:N があり、使役動詞に ?ara:suN、wara:suN があって、いずれも r 語幹化していない形 (母音語幹) があらわれる。古代日本語の f 語幹動詞に対応する安慶名方言の動詞が r 語幹化する以前には、w 語幹であったことがわかる。

否定形、うけみの形、使役動詞は文法的な派生動詞で、せまい意味での活用形ではないので、命令形やさそいかけの形と必ずしも同列にはあつかえないのだが、r 語幹化は、I r 3、I r 4、I r 5 のすべての活用形、派生形式に一樣におこったのではなく、活用形によって、あるいは、派生動詞によって差がみられるのである。

2. 2. 連用語幹

安慶名方言の動詞第一中止形は、単独で述語になることはなく、他の単語形式といっしょになって述語になったり、形づくりや単語づくりの要素になったりする。

多回・複合的な動作をあらわす形式 (kwate:niNdzi kwate:niNdzi suN (食っては寝、食っては寝 する)、?ama mi: kuma mi: suN (あっちを見 こっちを見 する) に使用される。

述語のとりたて形は、-ja (は)、-N (も)、-du (ぞ)、-ga (が) などの係助辞を第一中止形に後接させ、補助動詞 suN (する) をくみあわせ、補助動詞 suN の変化形によって文法的な意味をあらわしわけける。下の du のとりたて形のほかに、numiN suN (飲みもする)、numiga sura (飲みか する) など、係助辞N (も)、ga (か) のとりたて形がある。

?unu sake: siNsiz:ga <u>du</u> numuru. (その 酒は 先生が 飲むのだ。)	主語のとりたて
siNsizja sakidu numuru. (先生は 酒を 飲むのだ。)	補語のとりたて
siNsizja saki <u>numidu</u> suru. (先生は 酒を <u>飲み</u> ぞ する。)	述語のとりたて

強変化動詞の第一中止形は、基本語幹に語尾 -i のついたものだが、語幹末の子音が語尾 *i の逆行同化によって音韻変化し、第一中止形の語幹が基本語幹とことなる形になったも

15 古代日本語の「ハ行四段」ともよばれるもので、現代日本語では語幹末の子音が消失して語幹末が母音になっていたり、否定形をつくる語基などに w があらわれたりしている。

16 「ラ行化」あるいは「ラ行四段動詞化」「ラ行五段動詞化」ともよばれる。

のがある。この語幹の変種が連用語幹である。

終止形の直説法、質問法の非過去形、第2過去形、および連体形の非過去形、第2過去形、第三中止形や並存形などは、第一中止形を基にして派生した活用形だが、語幹（あるいは語基）と語尾や接辞、補助的な単語などとのむすぶつき方のつよさの度合いによって語幹と語尾が融合し、相互に影響して変化した結果、語幹に変種を生じさせたものがある。あるいは、特定の活用にかぎってこれらの変化をこうむらなかったものもある。

	基本語幹	連用語幹		
		第一中止	直説法 非過去	第三中止形
I m	jum-	jum-i	jum-uN	jum-a:ni
I b	jub-	jub-i	jub-uN	jub- a:ni
I n	ʃin-	ʃin-i	ʃin-uN	ʃin- a:ni
I k	kak-	katʃ-i	katʃ-uN	katʃ- a:ni
I g	kug-	kudʒ-i	kudʒ-uN	kudʒ- a:ni
I s	sas-	sas-i	sas-uN	sas- a:ni
I t	mat-	matʃ-i	matʃ-uN	matʃ- a:ni
I r 1	tur-	tu-i	tu-iN	tuj- a:ni
I r 2	tʃir-	tʃi:	tʃi:N	tʃij- a:ni
I d	kaNd-	kaNdʒ-i	kaNdʒ-uN	kaNdʒ- a:ni
I r 3	ʔarar-	ʔara-i	ʔara-iN	ʔaraj- a:ni
I r 4	ko:r-	ko:r-i	ko:r-iN	ko:rj- a:ni
	ʔumur-	ʔumu-i	ʔumuiN	ʔumuj- a:ni
I r 5	ʔir-／ʔja:	ʔi:	ʔi:N	ʔij- a:ni
II e 1	ʔukir-	ʔuki:	ʔuki:N	ʔuki-ja:ni
	tatir-	tati:	tati:N	tati-ja:ni
	narir-	nari:	nari:N	nari-ja:ni
II e 2	ʔukir-	ʔuki:	ʔuki:N	ʔuki-ja:ni
	ʔutir-	ʔuti:	ʔuti:N	ʔuti-ja:ni
	ʔurir-	ʔuri:	ʔuri:N	ʔuri-ja:ni
II i	tʃir-	tʃi:	tʃi:N	tʃi-ja:ni
	nir-	ni:	ni:N	ni-ja:ni
II id	ʔN:d-	ʔN:dʒ-i／mi:	ʔN:dʒ-i	ʔN:dʒ- a:ni

Ⅲ 1	'ur-	'u-i	'u-N	'uj- aɹni
Ⅲ 2	ʔar-	ʔa-i	ʔa-N	ʔaj- aɹni
Ⅲ 3	kuɹ	tʃiɹ	tʃuɹN	tʃaɹni
Ⅲ 4	sax	ʃiɹ	suN	saxni

基本語幹末の子音が～m、～b、～s、～n になる動詞（I m、I b、I s、I n）は、基本語幹と連用語幹が同音である。基本語幹末が～k、～g、～t になる動詞（I k、I g、I t）の連用語幹は、語尾**i* による逆行同化によって破擦音化して～tʃ、～dʒ になり、基本語幹とはことなる形になっている。基本語幹末の子音が r になる動詞（I r1、I r2）の連用語幹は、語幹末が母音になっていて、基本語幹とことなる形になっている。これは、語尾**i*の影響をうけた口蓋音化によって語幹末の子音～r、～rj が脱落したために生じたものである。

I r1 **tor-i* > turi > tu -i¹⁷⁾
 I r2 **kir-i* > kiri > tʃiɹ¹⁸⁾

おなじく基本語幹末の子音が r になる動詞（I r3、I r4、I r5）の連用語幹も語幹末が母音になっている。r 語幹化した形が I r1、I r2 とおなじ過程を経て母音語幹になった可能性もあるが、下にしめたように、r 語幹化していない形からも母音語幹を形成することも可能である。語幹に*ox*をふくむ動詞 I r4 でみると、r 語幹化していない形を想定する方が説明は簡単である。I r5 についても同様である。

I r3 **araw-i* > arawi > ʔarai > ʔara-i
 I r4 **kaw-i* > kawi > koɹi > koɹ-i
 I r5 **iw-i* > iwi > ʔiɹ > ʔiɹ

連用形の第三中止形と同時形も連用語幹を構成要素にもつが、I r1、I r2、I r3、I r4、および、II e1、II e2、II i の第三中止形と、同時形の連用語幹は、第一中止形、終止形非過去形などの連用語幹とはことなる形になっている。再編された変種を連用語幹と

17 音韻変化の過程をおおまかに図示するが、詳細な母音の音価、子音の音価（喉頭音化の有無、帯気の強弱）などについて本稿では省略する。

18 安慶名方言のばあい、前後を**i*にはさまれた r は脱落せず、tʃiɹN（切る）の第一中止形は tʃiri が予想されるが、tʃiɹ（切り）であられる。r 語幹ではない形なのか、このばあいにかぎって iɹi > ii > iɹ の変化が生じたのか、詳細は不明である。

区別して、融合語幹と呼ぶことにする¹⁹⁾。第三中止形は、第一中止形に *ari* (有り) がくみあわさって融合する過程で生じたものである。

I m **nom-i · ari* > *nomiari* > *numjari* > *numjazri* > *num-azni*
I r 1 **tor-i · ari* > *toriari* > *turjari* > *turjazri* > *tuj-azni*
I r 3 **araw-i · ari* > *araiari* > *ʔarajazri* > *ʔarajazri* > *ʔaraj-azni*
I d **kabur-e* > *kambure* > *kamre* > *kaNre* > *kaNd-i* (被れ)
 **kabur-i* > *kamburi* > *kamri* > *kaNri* > *kaNdʒ-i* (被り)

I d の *kaNdʒ-i* (被り) の連用語幹末が *~dʒ* になっているのは **i* の逆行同化による口蓋音化で、*ri* が *i* になるまえに、*~buri* > *~mburi* > *~mri* > *~nri* / *~ndʒi* の一連の変化がおきたためである。

直説法、質問法の非過去形、第2過去形は、*'uN* 融合型の活用形だが、第一中止形と同じ音韻変化がおきていて、直説法、質問法の非過去形、第2過去形も連用語幹を構成要素にしている。直説法、質問法の非過去形に属する活用形の語尾が *-i* ではじまるのも、*'uN* が融合する過程で語幹と語尾の境界の音声の変化した結果である。

I m **jom-i · uN* > **jumiuN* > *jumjuN* > *jum-uN*
I r 1 **tor-i · uN* > **turiuN* > *turjuN* > *tujuN* > *tuiN* > *tu-iN*
I r 3 **araw-i · uN* > **ʔarawiuN* > *ʔarajuN* > *ʔara-iN*
I r 4 **kaw-i · uN* > **kawiuN* > *koʒjuN* > *koʒ-iN*

I r 3 動詞の直説法、質問法の非過去形も *r* 語幹化した可能性がないわけではないが、どの段階で *r* 語幹化したのか、なお、検討を要する。

I r 2 動詞 (*tʃiʔN* 切る) は、*'uN* が融合する過程で語幹と語尾が統合してなが母音となり、語幹と語尾の境界も融合し、境界を設定できなくなったものである。このタイプは、音便語幹が促音になるので、他の *I r* 動詞とはことなる。

I r 2 **kir-i · uN* > *kirjuN* > *tʃijuN* > *tʃiʔN*

安慶名方言の混合変化動詞の第一中止形の語幹末には なが母音があらわれ、*r* 語幹化し

19 安慶名方言のばあい、融合語幹は *r* 語幹動詞の第三中止形と同時形にあらわれるが、首里方言では *m* 語幹動詞の終止形非過去古形 *junuN* の語幹などに融合語幹があらわれるし、伊平屋島方言や沖縄市比屋根方言にも *junuN* の形があって、融合語幹をみとめることができる。

ている基本語幹とはことなっている。この変種も連用語幹である。古代日本語では混合変化動詞の基本語幹（連用語幹も）は²⁰⁾、語幹末が*~i* になる動詞と*~e* になる動詞の2タイプあるが²¹⁾、安慶名方言のばあい いずれも*~e* になるタイプにさかのぼる。

2.3. 音便語幹

第二中止形は、第一中止形に助辞 *=te* がついてできているが、強変化動詞のばあい、第一中止形の語尾 *-i* をふくむ音節と、助辞 *=te* が相互に影響をあたえて変化した結果、語幹と語尾の再編がおこなわれた。あらたに発生した語幹を音便語幹とよぶ。音便語幹の語幹尾が母音でおわるタイプと促音でおわるタイプがあるが、第一中止形の基本語幹の末尾子音のちがいに応じてあらわれる。基本語幹の語幹尾が*~m*、*~b*、*~n*、*~r*、*~k*、*~g*、*~s*、*~d* になる動詞の第二中止形の語幹尾は母音になる。

基本語幹の末尾子音のちがいによって後続する語尾にも変種がみられる。第二中止形の語尾のばあい、無声破裂音 *-ti*、無声破擦音 *-tʃi*、有声破裂音 *-di*、有声破擦音 *-dʒi* がある。

母音語幹

ju-di (読んで)、ju-di (呼んで)、
tu-ti (取って)、ʔara-ti (洗って)、koʔ-ti (買って)、'u-t i (居て)、ʔa-t i (有って)
ka-tʃi (書いて)、sa-tʃi (刺して)、ʔi-tʃi ((言って))
ku-dʒi (漕いで)、ʃi-dʒi (死んで)

促音語幹

maQ-tʃi (待って)、tʃiQ-tʃi (切って)

2.3.1. 母音語幹

I m 動詞と I b 動詞の第二中止形の語尾は *-di* である。I m 動詞には nu-di (飲んで)、tʃitʃi-di (包んで)、tanu-di (頼んで) などが属し、I b 動詞には、ju-di (呼ぶ)、ʔaʃi-di (遊んで) などが属する。

r 語幹動詞のうち、I r1、I r2、I r3、I r4 は、第二中止形の語尾が *-ti* である。r 語幹動詞には、ʔara-ti (洗って)、kawa-ti (変わって)、tʃika-ti (使って)、tʃikana-ti (養って)、moʔ-ti (舞って)、hoʔ-ti (這って)、noʔ-ti (縫って)、noʔ-ti (絢って)、tuʔ-ti (問うて)

20 鈴木康之 (1975) の古代日本語の「混合変化の動詞」を参考にした。鈴木康之 (1975) では「起く」「受く」の叙述法一般叙述形の子音でおわる強変化型の動詞の語幹 (*ok-u*、*uk-u*) と、一般叙述形以外の母音でおわる弱変化型動詞の語幹 (*oki-ki*・*oki-keri*・*oki-yo*、*uke-ki*・*uke-keri*・*uke-yo*) が並存していることからの分類。

21 語幹尾が*~i* になる動詞は「上二段動詞」とよばれ、語幹尾が*~e* になる動詞は「下二段動詞」とよばれる。

などがある。

また、d 語幹動詞のうち、kaNdzuN（かぶる）、niNdzuN（ねむる）、jaNdzuN（やぶる）も語尾が -ti になる。

I k 動詞（sa-tʃi 咲いて）と I s 動詞の第二中止形の語尾は -tʃi である。I d 語幹動詞のうち、kuNdzuN（くびる・縛る）も語尾が -tʃi になる。

現代日本語では dʌʃite（出して）、okofite（起こして）のように音便化現象がみられないが、安慶名方言の I s 動詞は、ʔNdza-tʃi（出して）、ʔuku-tʃi（起こして）などのように脱落音便化し、語尾が破擦音化している。

I g 動詞（tu-dʒi 研いで）の第二中止形の語尾は、-dʒi である。また、I n 動詞も語尾は -dʒi である。ただし、I n 動詞は、sinuN（死ぬ）の 1 語である。

2.3.2 促音語幹

促音便語幹になる動詞は、I t 動詞（muQ-tʃi 持って）と I r2 動詞（ʔiQ-tʃi 入って）である。第二中止形の語幹尾が促音になる。I r2 動詞も第二中止形の語幹尾が促音になる。促音便語幹動詞の第二中止形の語尾は、-tʃi である。

安慶名方言のばあい、I r2 動詞の音便語幹は促音便化し、語尾が破擦音化してあらわれる点が I r1、I r3、I r4、I r5 とはことなる。

2.3.3 音便なし

現代日本語の弱変化動詞に対応する安慶名方言の混合変化動詞の第二中止形も語幹尾が母音でおわるが、現代日本語のばあいと同様に音便現象がおきていないとかがえる。すくなくとも、古代日本語の上一段型の活用をする動詞に対応する安慶名方言の動詞 niʔN（煮る）、tʃiʔN（着る）と tʃiʔN（切る）、ʔiʔN（入る）をくらべたとき、前者の第二中止形の語幹が促音になっていないのに対して、後者の語幹が促音になっているのがわかる。このことから、前者の語幹は r 語幹化していないとかがえられるのである。

音便語幹は、強変化動詞の第二中止形を構成要素にもつ、直説法・質問法の第 1 過去形、共存形、うらめ条件形、継続相動詞などの形つくりの要素にもなっている。音便語幹につづく語尾も -ti のほかに、有声化した -di、口蓋音化した -tʃi や -dʒi がある。

3. 音便語幹の形成

現代日本語と安慶名方言の第二中止形を対比させると次表のようになる。

第6表

現代日本語		安慶名方言	
強変化		強変化	
joN-de	(読んで)	I m	ju-di
joN-de	(呼んで)	I b	ju-di
fiN-de	(死んで)	I n	fi-dʒi
kai-te	(書いて)	I k	ka-tʃi
koi-de	(漕いで)	I g	ku-dʒi
safi-te	(刺して)	I s	sa-tʃi
toQ-te	(取って)	I r 1	tu-ti
kiQ-te	(切って)	I r 2	tʃiQ-tʃi
kabuQ-te	(被ぶって)	I d	kaN-ti
araQ-te	(洗って)	I r 3	?ara-ti
kaQ-te	(買って)	I r 4	koʔ-ti
omoQ-te	(思って)	I r 4	?umu-ti
iQ-te	(言って)	I r 5	?i-tʃi
maQ-te	(待って)	I t	maQ-tʃi
弱変化		混合変化	
tate-te	(立てて)	Ile 1	tati-ti
ni-te	(煮て)	Ii	ni-tʃi

混合変化動詞の第二中止形は、音便現象を起こさず、第一中止形に助辞 -te を後接させていることが確認できる。強変化動詞の第二中止形のばあいも第一中止形に助辞 -te を後接させているが、音韻変化（音便現象もふくめて）の結果、語幹と語尾の再編がおこなわれている。強変化動詞を中心に現代日本語と比較しながらそこから得られることをてがかりにして、安慶名方言の音便語幹形成の過程について、第二中止形を代表させてみていくことにする²²⁾。

- (1) 基本語幹の末尾音が m、b、n、k、g、s、r、f になる現代日本語の強変化動詞に対応する安慶名方言の動詞の第二中止形の助辞 -te の直前の音節（第一中止形の末尾の音節）は脱落している。この語幹末の音声（促音、撥音、i）が脱落する現象を「脱落音便」とよぶ。

22 現代日本語の強変化動詞の r 語幹動詞と f 語幹動詞の第二中止形に促音があらわれるのを促音便という。m 語幹動詞、b 語幹動詞に撥音があらわれるのを「撥音便」といい、k 語幹動詞、g 語幹動詞で k、g が消失して母音語幹（～i）になるのを「イ音便」という。

- (2) 現代日本語と安慶名方言のいずれも t 語幹動詞に「促音便」がみられる。
- (3) I m 動詞、I b 動詞、I g 動詞は、-te が有声子音であられる。これは現代日本語のそれと同じである。
- (4) それ以外の動詞は -te が無声子音であられる。これも現代日本語のそれと同じである。
- (5) I k・I g・I t・I s 動詞は、-te が破擦音化してあられる。
- (6) r 語幹動詞のうち I r 2、I r 5 動詞は -te が破擦音化しているが、これ以外の r 語幹動詞は破擦音化していない。
- (7) 音便現象のおきていない混合変化動詞のうち、II 動詞も -te が破擦音化している。

2.4.1 語尾の破擦音化

現代日本語の弱変化動詞のうち、N 2 i に対応する安慶名方言の混合変化動詞 II i は、-te が破擦音化しているが、N 2 e に対応する安慶名方言の混合変化動詞 II e 1 は、破擦音化していない。-te に前接する母音 i の同化によって破擦音化したのである。

II i *ni = te > ni-tʃi

II e 1 *tate = te > tati-ti

おなじ r 語幹でありながら -te が破擦音化する動詞と破擦音化しない動詞がある。そのちがいは、第一中止形の語末音節の直前の母音が *i であったか、それ以外の母音であったかによる。*i のばあい、その *i の進行同化による破擦音化であろう。

I r 5 *if-i = te > ?iwiti > ?iwti > ?i-tʃi (言って)

I r 4 *kaf-i = te > kawiti > kawti > koʔ-ti (買って)

I r 3 *araf-i = te > ?arawiti > ?ara(ʔ)ti > ?ara-ti (洗って)

同様に、おなじ r 語幹でありながら I r 2 動詞と I r 5 動詞は -te が破擦音化し、I r 1 動詞と I r 3 動詞と I r 4 動詞は破擦音化しない。また I r 2 型動詞は、促音便化しているが、I r 1 動詞と I r 3 動詞と I r 4 動詞と I r 5 動詞は脱落音便化している。

I r 1 *tor-i = te > turti > tuQti > tu-ti (取って)

I r 2 *ir-i = te > ?iritʃi > ?irtʃi > ?iQ-tʃi (入って)

安慶名方言には**i*に先行する**r*が脱落する変化(**ri>i*)があるが、I r 1 動詞で*r*の脱落(イ音便)を想定したばあい、**i*は-teを破擦音化させることになるが、I r 1 動詞では破擦音化していないので、*r*の脱落(イ音便)を想定することは困難である。逆に、-teが破擦音化していないことから、破擦音化するまえに**i*、もしくは**ri*の脱落を想定しなければならない。**i*、もしくは**ri*の脱落は促音便化である。

いっぽう、I r 2 動詞では-teが破擦音したあとに促音便化しているが、脱落音便化はしていない。*r*語幹動詞のなかでI r 2 動詞だけが促音語幹である理由は不明である²³。

安慶名方言のI d 動詞のうち、kaNdʒuN(かぶる)、niNdʒuN(ねむる)、jaNdʒuN(やぶる)も語尾が-tiになる。一方、おなじI d 動詞でもkuNdʒuN(くびる・縛る)は語尾が-tʃiである。I r 2 動詞と類似の音便化を経たとかんがえる。

**kabur-i* = te > ka^mburti > kaNti > kaN-ti (被って)

**kubir-i* = te > ku^mbiritʃi > kuNrtʃi > kuNQ^tʃi > kuN-tʃi (縊って)

I k 動詞、I g 動詞、I t 動詞、I s 動詞は、語幹の音声形式の如何をとわず-teが破擦音化してあらわれる。

I t 動詞は、語幹を促音便にし、-teを破擦音化させている。第一中止形の語尾の**i*は、-teを破擦音化させていて、そのあとに促音便化したが、脱落音便化はみられない。

また、I r 2 型動詞も語幹を促音便にし-teを破擦音化させているが、脱落音便化していない。母音*i*は脱落して促音便が発生するまえに、語尾の*ti*を*tʃi*に破擦音化させたものとかんがえられる。

I t **matʃ-i* = te > matʃitʃi > maQ-tʃi (待って)

I r 2 **ir-i* = te > ʔiritʃi > ʔiQ-tʃi (入って)

I k 動詞は、語尾-teを破擦音化させ、語幹は脱落音便化している。I k 動詞がI t 動詞とおなじ変化を経ていれば、促音便語幹になったとみられるが、I k 動詞が促音便でないことから、I t 動詞とはことなる変化を経たとみるべきだろう。

語幹の音声形式の如何をとわず破擦音化させ、脱落音便化しているのは、I k 動詞のほかには、I s 動詞とI g 動詞がある。ただし、I g 動詞は、語尾を有声子音化させていて、-dʒiである。

I g 動詞とI k 動詞の基本語幹末の子音(*g*と*k*)は、軟口蓋奥舌を調音点にする破裂

²³ nukudʒiri(鋸)、tʃiri(塵)などのように**i*にはさまれた**r*は脱落しないが、そのことがr2型動詞だけが促音語幹であることと関連があるのだろうか。

音で有声／無声で対立するが、その有声／無声の対立が -te の有声性 -dʒi と無声性 -tʃi にひきつがれている。これは現代日本語の I k 動詞、I g 動詞のイ音便化に似る。安慶名方言の I k 動詞（I g 動詞も同様）がイ音便化していたと仮定すると、以下の変化を想定できる。

I k l *sak-i = te > sakitʃi > saitʃi > sa-tʃi (咲いて)

I s 動詞は、現代日本語では dafite (出して)、okofite (起こして) のように音便化現象がみられないが、安慶名方言のばあい、-tʃi に破擦音化させたあとに脱落音便化している。I t 動詞のように促音便を経たとみることも可能だが、I t 動詞のばあい、語幹末の促音がそのまま保存されているのに対して、I s 動詞は母音語幹になっているので、I s 動詞が I t 動詞とおなじように促音便を経たとはかんがえにくく、語尾が破擦音化し、語幹が脱落音便化した I k 動詞とおなじくイ音便化したとかんがえられる。

I s *pos-i = te > huʃitʃi > huitʃi > hu-tʃi (干して)

2.4.2 語尾の有声子音化

I m・I b・I n・I g 動詞の語尾は、有声子音化（-te>di）し、それ以外の動詞は、有声子音化せず、無声子音のままである。有声子音化する動詞は、現代日本語と同じで、有声子音化した日本語の I m・I n・I b 動詞は撥音便化し、I g 動詞はイ音便化している。

I m 動詞と I b 動詞の語尾は、-di で、有声子音化はしているが、破擦音化はしていない。第一中止形語尾 *i が -te を破擦音化させるまえに有声子音化させ、脱落している。*i がさきに脱落したとみるなら、I m 動詞は撥音便化したとかんがえられる。I b 動詞も I m 動詞と同様であろう。I n 動詞も同様の変化を経たが、脱落音便化したあとに、語頭音節の *i によって破擦音化して -dʒi になったのであろう。

I m *nom-i = te > numite > numti > nuNdi > nu-di

I b *job-i = te > jumbite > jumdi > juNdi > ju-di

I n *ʃin-i = te > ʃinte > ʃiNdi > ʃidi > ʃi-dʒi

I k 動詞の語尾は -tʃi で、I g 動詞の語尾は -dʒi であり、両者ともに脱落音便化するまえに -te を破擦音化させている。I g 動詞は、脱落音便化する以前に破擦音化していなければならないし、有声子音化させていなければならない。

I k 動詞も I g 動詞も -te が破擦音化しているので、イ音便化していたと考えられる。し

かし、I k 動詞が無声子音であられ、I g 動詞が有声音であられることから、I g 動詞が完全にイ音便化するまえに、有声音化 -dʒi していなければ、k 語幹無声／g 語幹有声音の違いはおきない。イ音便化・口蓋音化のあとに脱落音便化している。

I k *sak-i = te > sakitʃi > saitʃi > sa-tʃi (咲いて)

I g *tog-i = te > tuⁿgitʃi > tuŋidʒi > tu-dʒi (研いで)

I r 5 動詞の第二中止形 ʔi-tʃi (言って) が促音便化していないことから、I r 5 動詞の音便語幹は、r 語幹化していないとかがえる。r 語幹化していれば、tʃiQ-tʃi (切って)、ʔiQ-tʃi (入って) のように促音便になっているはずであるが、そうっていないからである。また、I r 4 動詞は、語幹の母音を o: とながくのぼすことから、以下に示すようにウ音便化していた可能性がたかく、同様に、I r 1 動詞、I r 3 動詞もウ音便化していたとかがえられる。

I r 5 *iw-i = te > ʔiwti > ʔiti > ʔi-tʃi

I r 4 *kaw-i = te > kawti > ko:ti

I r 3 *araw-i = te > ʔarawti > ʔara(ɹ)ti > ʔara-ti

I r 2 動詞の促音化は口蓋音化したあとに起きていた。しかし、i の前では促音化がおくれ、口蓋音化したあとに促音化したが、I t 動詞の促音化と同様に脱落音便はおきていない。

現代日本語の弱変化動詞に対応する安慶名方言の混合変化動詞の第二中止形も語幹尾が母音でおわり、現代日本語のばあいと同様に音便現象がおきていない。すくなくとも、古代日本語の上一段型の活用をする動詞に対応する安慶名方言の動詞 ni:ɹN (煮る)、tʃi:ɹN (着る) と tʃi:ɹN (切る)、ʔi:ɹN (入る) をくらべたとき、前者の第二中止形の語幹が促音便になっていないのに対して、後者の語幹が促音便になっていることから、前者の語幹は r 語幹化していないとかがえられるのである。

3. 活用のタイプ

安慶名方言の強変化動詞は、現代日本語の強変化動詞 (鈴木重幸1972の第一変化) に対応するもので、混合変化動詞とことなり、音便語幹を有する。混合変化動詞は、現代日本語の弱変化動詞 (鈴木1972の第二変化、いわゆる一段動詞) に対応し、音便語幹をもたない。現代日本語の弱変化動詞の基本語幹が母音でおわり、強変化動詞の基本語幹が子音でおわっているのに対して、安慶名方言の混合変化動詞の基本語幹の末尾は、子音になっていて、その点は現代日本語とはことになっている。安慶名方言のばあい、弱変化動詞の基本

語幹が *r* 語幹化したためである。混合変化動詞は、音便語幹をとりたてて設定する必要がなく、連用語幹の末尾が母音でおわるなど、現代日本語の弱変化動詞とおなじ特徴も有していて、安慶名方言のばあい、弱変化動詞と強変化動詞の混合の活用をするようになっていくからである。

特殊変化動詞には ?a_N (ある)、'u_N (いる)、su_N (する)、tʃu_r_N (来る)、ne_r_N (ない) が属し、それぞれ特殊な活用する。また、maNdo_r_N (たくさんある) は、継続相の形だけを有するという点で特殊変化動詞に分類される。mo_rru_N (いらっしゃる)、meNse_r_N (いらっしゃる) の尊敬動詞も特殊変化動詞に分類される。

第7表

	基本語幹	連用語幹	音便語幹
強変化			
I m	jum-a (読もう)	jum-i (読み)	ju-di (読んで)
I b	jub-a (呼ぼう)	jub-i (呼び)	ju-di (呼んで)
I n	fin-a (死のう)	fin-i (死に)	fi-dzi (死んで)
I k 1	kak-a (書こう)	katʃ-i (書き)	ka-tʃi (書いて)
I g	kug-a (漕ごう)	kudʒ-i (漕ぎ)	ku-dzi (漕いで)
I s	sas-a (刺そう)	saf-i (刺し)	sa-tʃi (刺して)
I t	mat-a (待とう)	matʃ-i (待ち)	maQ-tʃi (待って)
I r 1	tur-a (取ろう)	tu-i (取り)	tu-ti (取って)
I r 2	tʃir-a (切ろう)	tʃi _r (切り)	tʃiQ-tʃi (切って)
I d 1	kaNd-a (被ろう)	kaNdʒ-i (被り)	kaN-ti (被って)
I d 2	kuNd-a (縛ろう)	kuNdʒ-i (縛り)	kuN-tʃi (縛って)
I r 3	?arar-a (洗おう)	?ara-i (洗い)	?ara-ti (洗って)
I r 4	ko _r -a (買おう)	ko _r -i (買い)	ko _r -ti (買って)
I r 5	?jax/?ir-a (言おう)	?i _r (言い)	?i-tʃi (言って)
I k 2	?ik-a (行こう)	?itʃ-i (行き)	?N-dzi (行って)
混合変化			
II e 1	?ukir-a (受けよう)	?ukir (受け)	?uki-ti (受けて)
	tatirarir-a (立てられよう)	tatirarir (立てられ)	tatiraQ-ti (立られて)
	?aNdir-a (溢れよう)	?aNdi _r (溢れ)	?aNdi-ti (溢れて)
II e 2	?utir-a (落ちよう)	?uti _r (落ち)	?uti-ti (落ちて)
	?ukir-a (起きよう)	?ukir (起き)	?uki-ti (起きて)
II i	nir-a (煮よう)	nir (煮)	ni-tʃi (煮て)

II id	'Nɪd-a (見よう)	'Nɪdʒi~miɪ (見)	'Nɪ-tʃi (見て)
特殊変化			
III 1	'ur-a (居よう)	'u-i (居り)	'u-ti (居て)
III 2	ʔar-aɪ (有らば)	ʔa-i (有り)	ʔa-ti (有って)
III 3	kuɪ (来よう)	tʃiɪ (来)	Qtʃi (来て)
III 4	saɪ (しよう)	ʃiɪ (し)	Qʃi (して)
III 5	neɪN (ない)	neɪN (ない)	neɪN-tiɪ (なかったか ²⁴⁾)

3. 1. 強変化 (子音語幹)

jɪn-uN (死ぬ) は、基本語幹末の子音が ~n になる動詞で、第二中止形の語尾は -dʒi である。この動詞も m 語幹動詞のばあいと同様に撥音便化したあとに、さらに脱落音便化し、語尾も有声音化して -di になったが、語頭音節の母音 i による進行同化によって破擦音化して、-dʒi になったとかがえられる。

ʔitʃ-uN (行く) は基本語幹末子音が ~k で、連用語幹の末尾子音が ~tʃ になる動詞だが、音便語幹末の子音は -dʒ である。基本語幹末が ~k で連用語幹末が ~tʃ なのは、I k と共通で、音便語幹が -dʒi になるのは I n (jɪn-uN 死ぬ) と共通である²⁵⁾。音便語幹からつくられる活用形に I n 型の語幹が混じるのは「うめあわせ」のてつづきによるものであろう²⁶⁾。

ʔitʃ-uN (行く)、ʔik-aN (行かない)、ʔN-dʒi (行って) (参考) ʔN-dʒaN (行った)

3. 2. 混合変化 (強変化と弱変化の混合)

現代日本語の弱変化動詞 (鈴木重幸 (1972) の第二変化) は、基本語幹末が母音になり、命令形、勧誘形の語尾が -ro、-joɪ である。基本語幹の末尾が子音になり、命令形、勧誘形の語尾が -e、-oɪ となる強変化とはことなっている。

現代日本語の弱変化動詞に対応する安慶名方言の混合変化動詞は、一部をのぞいて、基本語幹の末尾が -r になっていて、ここでも r 語幹化がみられる。また、命令形、勧誘形の語尾がいずれも -eɪ、-a になっていて、強変化動詞とおなじになっている。現代日本語の弱変化動詞に対応する安慶名方言の動詞を混合変化動詞とする要因になっている。

現代日本語のばあい、弱変化動詞には基本語幹末の母音が ~e になる動詞と、~i になる

24 否定動詞 neɪN (ない) の第二中止形が得られていないが、質問法の過去形が第二中止形の語尾の母音を長母音化させてつくるものなので、この表ではその形をあげている。

25 「音便語幹から作られる形のみが「往ぬ」に対応するため不規則となった。たとえば、ʔNdʒi (行って) は「往にて」に対応する。(上村幸雄1963)」安慶名方言も上村 (1963) の首里方言と同じであろう。

26 「うめあわせ」については鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』を参照。

動詞とがあるが²⁷⁾、安慶名方言のばあい、前者の～e に統一されている。琉球語全体におきた せま母音化のため、いずれもiになっていて、わかりにくいのであるが、i に先行する子音が口蓋音化していないことから、いずれも *e (下二段活用) に対応する。

音便語幹

混合変化動詞では、強変化動詞にみられるような音便化現象がおきていない。

*nage = te > nagi-ti > nagi-ti (投げて)

*ni = te > ni-ti > ni-tʃi (煮て)

起きる、見せるなどの現代日本語の弱変化動詞には音便化現象がみられない。安慶名方言も音便化していない。そのうえ、安慶名方言のばあい、古典日本語の下二段、上二段に対応する動詞では語末が -ti になっていて、口蓋音化、破擦音化もおきていない。

hititi (捨てて)、ʔukiti (受けて)、kariti (枯れて)、nagiti (投げて)、mifiti (見せて)、ʔutiti (落ちて)、ʔukiti (起きて)、ʔuriti (降りて)、ʔaNditi (溢れて)、jaNditi (破れて)、

古典日本語の上二段型に対応する安慶名方言の動詞では、どんな音便化現象もみられない。音便化していないが、第二中止形の語尾が破擦音化して -tʃi になっている。接辞 -te が tʃi に破擦音化しているのは、語幹の母音 i の進行同化によってひきおこされたものである。

tʃitʃi (着て)、nitʃi (煮て)、nitʃi (似て)、'itʃi (坐て)、

'N:dʒ-uN (見る)、'N:d-aN (見ない)、'N:t-tʃi (見て) のばあい、音韻変化の結果、わかりにくくなっているが、基本語幹、連用語幹は r 語幹化している。しかし、第二中止形は、口蓋音化はしているが、音便のない形である。強変化動詞と弱変化動詞の混合といえるだろう。また、この動詞の第一中止形には、mix の形があって、連用語幹の形が代表形のそれとことなる。ここでも強変化動詞と弱変化動詞の混合がみられる。勧誘形は、'N:d-a (見よう) で強変化動詞の活用形だが、この動詞を補助動詞にした「もくろみ動詞」の 'N:tʃi ma: (見てみる) では、ことなる語幹の活用形が使用されている。

文法的な派生によって形つくられた うけみの形、可能動詞、使役動詞 numafimizN も形

27 基本語幹末の母音が～e になる古代日本語の動詞を「下二段動詞」といい、～i になる動詞を「上二段動詞」という。現代日本語ではいずれも一段化している。

つくりの面からみると、混合変化動詞に分類される。

3.3. 特殊変化

特殊変化動詞には、'uN（居る）、ʔaN（ある）、suN（する）、tʃu: N（来る）、ne: N（ない）、maNdo: N（たくさんある）がある。

'uN（居る）は、過去形が第1過去形の1系列しかないこと、直説法、質問法の活用形が'uN 非融合型の活用形であること、アスペクトによる完成相と継続相の対立をしめさないことなどは、他の運動動詞にはみられないおおきな特徴である。ʔaN（有る）は、命令形、勧誘形などのはたらきかけ法もないし、継続相や、受身の形、使役動詞、可能動詞などの文法的派生動詞を形成しないという点も他の動詞とことなっている。うえにのべたように、'uN（居る）もʔaN（有る）も特殊変化ではあるが、語幹と語尾の構成・形成の点からみると、全体的にr語幹動詞的な特徴をもっているといっていよう。

現代日本語の「ない」が形容詞に分類されるのとことなり、安慶名方言の ne: N（ない）は、その形つくりから特殊変化動詞にふくめられる²⁸。ne: N（ない）は否定動詞のみが存在し、命令形、勧誘形がないし、継続相も、うけみの形、使役動詞、可能動詞などの派生動詞ももたないなどの点でʔaN（有る）と共通し、形容詞とも共通する。

しかし、ʔaN（有る）のとりたて形が suN（する）を補助動詞としているのに対して、ne: N（ない）の係助辞によるとりたて形は、ʔaN（有る）を補助動詞としている点で形容詞にちかい。ne: N naiN（なく なる）のように、naiN（なる）とくみあわさるのも形容詞と共通である。（形のつくり方はことなるが。）いっぽう、とりたて形を構成する補助動詞がʔaN（ある）になっているのだが、「ない」を補助動詞にしている現代日本語とはことなる。また、maNdo: N（たくさんある）は完成相の形がなく、継続相の形しかもたない特殊な動詞である。

ʔaidu suru（有りゾ する）、 ʔaiga sura（有りは するだろうか）

ʔaiN saN（ありもしない）

ne: Ndu ʔaru

ne: Nga ʔara（ないので だろうか）

ne: no: ʔaraN（なくは ない）

Ⅲ 1 'ur-a（居ろう） 'uN（居る） 'ui（居り） 'u-ti（居て）

Ⅲ 2 ʔar-a:（有らば） ʔaN（有る） ʔai（有り） ʔa-ti（有って）

Ⅲ 3 ku:（来よう） tʃu: N（来る） tʃi:（来） Qtʃi（来て）

28 上村幸雄（1963）の首里方言の ne: N も、仲宗根政善（1983）の今帰仁方言の ne: nu も不規則動詞に分類されている。

Ⅲ 4 saꞥ (しよう) suN (する) ʃiꞥ (し) Qʃi (して)

neꞥN (ない) には neꞥNtaN (なかった)、neꞥNtiꞥ (なかったか)、neꞥNteꞥN (なかった・パーフェクト相) がある。maNdoꞥN (たくさんある) には、maNdoꞥtaN (たくさんあった)、maNdoꞥtiꞥ (たくさんあったか)、maNdoꞥteꞥN (たくさんあった・パーフェクト相) がある。

参考文献

- 上村幸雄 (1963) 「首里方言の文法」 (『沖縄語辞典』 国立国語研究所編)
- 奥田靖雄 (1973) 「単語における形式」
- 奥田靖雄 (1974) 「単語をめぐって」
- かりまたしげひさ・島袋幸子 (2006) 「琉球語の終止形－沖縄謝名方言と沖縄安慶名方言－」 (『日本東洋文化論集10号』 琉球大学法文学部紀要)
- かりまたしげひさ (2004) 「具志川市安慶名方言の動詞のテンス・アスペクト・ムード体系－」 (『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系－標準語研究を超えて』 工藤真由美編、ひつじ書房)
- 鈴木重幸 (1996) 『形態論・序説』 むぎ書房
- 鈴木重幸 (1983a) 「形態論的なカテゴリーについて」 (『教育国語』 72号、『形態論・序説』 1996、むぎ書房に再録)
- 鈴木重幸 (1983b) 「動詞の形態論的な形の内部構造について」 (『横浜国大 国語研究』 創刊号、『形態論・序説』 1996、むぎ書房に再録)
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 鈴木康之 (1975) 『古典語文法要説』 池上書店
- 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』 角川書店
- 明星学園国語部会 『古代日本語文法 (試案)』 プリント版